昭和のイクメン

森川　詩歌

父は、昔気質の仕事人間で、私が子どもの頃は、家庭など顧みたことはなかった。

警察官だった父は、刑事ドラマさながら、事件が起こると帰宅も儘ならず、やっと取れた休みに予定していた旅行さえ、中止になったこともある。当然、参観日や運動会を観に来てもらったことはないし、公園に連れて行ってもらったことも、お風呂に入れてもらった記憶さえない。家事も育児も母に任せきりな上、たまの休みに家に居るかと思えば、些細なことで怒鳴り散らし、仕事のストレスを家庭でぶちまけているような人だった。

しかし母は、そんな父に文句一つ言わず、外で働く父を尊重し、献身的に支え続けた。私は、いざとなれば母の味方に付くと心に決めていたし、できる限り父の機嫌を損ねないことが、母のためだと思っていた。だから、幼いなりに、父の前でも要領よく振る舞うよう努めていた。

しかし、八つ離れて生まれた弟はそうではなかった。思春期を迎えると、目に見えて荒れた。ピアスに茶髪に授業のエスケープ。問題を起こして、母が学校に呼び出されたことは一度や二度ではない。

父は、そこに至って初めて、子どもと向き合うことの必然性を感じたようで、弟が母の手に負えない時は、仕事を切り上げて帰ってくることもあった。しかし、最初は諭すように話していても、一向に反抗的な態度を崩さない弟に、結局最後は激昂し、力でねじ伏せようとするのだった。

この頃、既に大学生になっていた私は、そんな父の姿が痛々しかった。子育ては母に任せきりだったが、弟が生まれた時の喜びの大きさは、言葉にせずとも十分伝わってきた。幼い弟が、「大きくなったら、警察官になる」と言った時の、父の愛しげな表情は、今でも忘れない。そんな息子に、自分の思いを伝える手段が拳しかなく、それでも息子は、父の思いに応えようとはしなかったのだ。

私はてっきり、父のことだから「お前の育て方が悪かったんだ」などと、理不尽に母を責めるのかと思っていた。しかし、意外にも父は、母と二人だけになったリビングで、

「小さい頃、自分がきちんと関わってやらなかった報いだ」と自分のことを責めていた。あの時ほど、父の背中が小さく見えたことはない。

後になって分かったことだが、父はあの頃辞表を書いて持ち歩いていたらしい。万が一にも息子が法に触れるようなことをしたら、責任を取るつもりだったのだろう。

しかし、幸い辞表は提出されることはなかったし、弟は無事に高校へ進学した。私も、予てからの夢だった教職に就いた。そこで初めて、気難しくて非家庭的だと思っていた父の、本当の偉大さを知ることになった。

自分が社会人になり、仲間からも生徒からも保護者からも信頼され、認められる仕事をすることがどれだけ難しいことかを思い知った。自分の不甲斐なさと、責任の重さに押しつぶされそうになっても、仕事は待ってくれない。父はそんな中で三十年間奮闘し、上司から信頼され、部下から慕われ、組織の中でなくてはならない存在になったのだ。

思い返せば若い頃、日付が変わってから帰宅した後でも、分厚い専門書を片手に、昇任試験の勉強をしていたように思う。あの頃の父には、自由な時間どころか、ほっと心や身体を休める暇さえなかっただろう。今の私には、到底真似することはできない。それでも、なんとか粘って、今の仕事に喰らいついてやろうと思えるのは、あの頃の父の姿を見て育ったからかもしれない。

昨今、「イクメン」という言葉と共に、妻に代わって育児休暇をとり、子どもとの時間を大切にする男性がもて囃されている。私自身、結婚し子を持つ身としては、羨ましい限りだ。しかし、不思議と「私の父もそうであったなら」とは思わない。

確かに父は、オムツを換えてくれたこともなければ、ミルクを与えてくれたこともなかっただろう。公園にも連れて行ってはくれなかったし、絵本も読んでくれたことはない。いわゆる「イクメン」の定義からは、大きく外れた父親だった。しかし「子を育む」とは、決して時間を共有し、世話を焼くことだけではないと、私は思う。父は、あの大きな背中で、人として、働く者として大切なことを、しっかりと私たちに教えてくれた。ある意味、古き良き時代の、立派な「イクメン」だった。

昨年大学を卒業した弟は、父の後を追って警察官になった。弟いわく、「警察学校の卒業式で、俺の名前を読み上げた時、親父の声は震えていた」らしい。そう言ってからかいつつも、同じ道を選んだ弟は、私以上に父の大きさを感じているに違いない。

私も、きっと弟も、「昭和のイクメン」たる父に育てられたことを、心から誇りに思う。